

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(和文)) 1. 訪問看護のための事例と解説から学ぶ在宅終末期ケア	共著	平成20年2月	中央法規出版	在宅で終末期ケアを担う訪問看護師を対象に、終末期ケアに必要な知識や態度を解説した。さらに在宅で終末期を過ごした事例を時系列で経過を紹介し、訪問看護師が終末期ケアを行うときの参考にできるように示した。執筆部分は第2章「住み慣れた地域で死を迎える」p8-27、第4章「自宅で最期を迎えるには」の1節終末期ケアに必要な知識と技術、2節事例からの学び方-事例検討のこつ、3節事例から学ぼうの前半の46-71を執筆した。五十嵐いずみ、 <u>角田直枝</u> 、川崎千鶴子、桑田美代子ほか。
2. 明日の在宅医療第6巻在宅医療と人材養成・人材確保	共著	平成20年9月	中央法規出版	在宅医療の具体像を理論と実践について明示し、訪問看護やリハビリとの連携や医療政策についても述べられた7巻シリーズの1冊である。そのなかで6巻第10章訪問看護認定看護師の養成研修と担当し、当時全国で行なわれていた訪問看護師教育から、平成17年度から開始された訪問看護認定看護師教育の実際とその展望について述べた。執筆部分はP192-207である。佐藤智、開原成允、井部俊子、 <u>角田直枝</u> ほか。
3. 訪問看護は“所長”で決まる	単著	平成20年11月	日本看護協会出版会	訪問看護ステーションの所長が部下と対応する場面の具体例をあげて、よりよい対応を解説をした。そして、所長が学ぶべき知識やとるべき行動について、自己点検が継続的にできるように、自己評価票を提示した。所長が成長することにより働きやすい職場となり、選らばれる訪問看護ステーションになっていくことを示した。
4. 癒しのエンゼルケア		平成22年8月	中央法規出版	看取りからご遺体の移送・安置まで、ご家族の希望に沿ったエンゼルケアを解説した。看護師はエンゼルケアをグリーフケアの一部として行うことで、家族の悲嘆を癒し、それによる看護師自身も癒されることを伝えた。担当箇所は、編集と、2章暮らしの延長線上にあるエンゼルケアp36-74、4章その人らしい表情を作る看護技術p112-160、5章事例で学ぶエンゼルケアp162-170を担当した。林直子、伊藤茂、川村三希子、 <u>角田直枝</u>

5. 在宅看護実習ガイド	共著	平成23年7月	照林社	看護学生の在宅看護実習で経験できる事例は限られている。実際に体験しない暮らしや、実習では見えない療養者の生活について理解が進むように、必要な知識や視点を解説し、事例におけるアセスメントやケアの実際を示した。担当は3章在宅での患者・家族支援の方法のなかの、生活支援（食事、排泄、清潔、移動、安全管理）p60-108を執筆した。山田雅子、内田千佳子、及川郁子、角田直枝ほか。
6. がん疼痛ケアガイド	共著	平成24年7月	中山書店	がんによる疼痛へのケアを、生活支援の場面で活かせるよう、身体部位や病態別に沿って解説した。在宅や高齢者の施設では、幅広い部位のがん患者に対応せざるをえない。そのような場で働く看護師に役立つよう、疾患の解説とその疾患による痛みの特徴を解説した。担当は、濱本千春氏とともに編集を行うと共に、執筆は1章総論「がんの痛みと看護」p2-5を担当した。角田直枝、濱本千春、内海明美、川並利子ほか。
7. よくわかる在宅看護	共著	平成24年10月	学研	訪問看護師や在宅看護論を学ぶ学生に役立つよう、在宅看護の実践に必要な知識や技術を解説した。また、実際に用いられている援助のスキルを状況別・処置別に述べ、特に写真やイラストを多く用いて、実践者にも有用となるように解説した。担当は編集と、1章在宅看護の基礎知識p2-8、2章状況別・在宅看護援助のスキル5節高齢者・認知症患者への対応p48-52、3章処置別・在宅看護援助のスキル18節エンゼルケア218-223の執筆であった。角田直枝、野崎加世子、山之腰由佳、大島泰江ほか。
8. 訪問看護で変わる希望の在宅介護	単著	平成26年2月	小学館	一般住民には、まだ訪問看護の認知度は低く、訪問介護との区別が付かなかつたり、在宅介護を避けたいという考えが多い。そこで、一般住民に向けて、訪問看護や介護保険の仕組みを説明したうえで、訪問看護の効果や訪問看護の利用によって、日常の健康管理の向上や機能改善のきっかけとすることで、介護負担が軽減することを紹介した。

9. 訪問看護は“所長”で育つ	単著	平成29年11月	日本看護協会出版会	訪問看護ステーションは、一般に小規模であり、病院とは異なり、所長は、管理者と教育者と実践者を兼ねている。この特徴を活かすと、所長は実践を見せながら教育ができるともいえる。訪問看護師を育てるために看護管理者（所長）に求められる行動や、人材育成のスキルについて、事例を通して解説した。
10. 平成30年版看護白書	共著	平成30年11月	日本看護協会出版会	地域の基幹病院として、他の病院や訪問看護ステーションと、出向や研修といった方法を活用して人事交流を行った。自施設とは異なる機能の病院や所属で業務をしたり体験することにより視野が広がり、人材育成の機会となった。認定看護師の派遣も行うことで、地域のなかでの認定看護師等の活用も増え、地域としての看護の質に繋がることを示した。担当は、4章1節基幹病院として取り組む地域医療人材の育成・活用一施設間協働による看護の質の向上でp132-143. 吉川久美子、荒木暁子、川本多恵子、角田直枝ほか。
11. イラストでわかる元気になる看護管理	単著	平成30年12月	中央法規出版	看護管理でよく出会う場面における、望ましい看護管理者の行動を示した。さらに、看護管理に必要な基礎知識を基礎教育のテキストでも紹介されている理論を中心に紹介し、さらに、問題解決のスキルを解説した。実践を担う看護管理者が負担感や疲労感を感じないで手に取ることができ、理解もふかめられるよう、イラストを多く取り入れ、視覚的にもわかりやすい記述とした。
12. 病院と地域を“看護”がつなぐ	単著	令和元年10月	日本看護協会出版会	月刊「コミュニティケア」に連載しているエッセイの書籍化で、病院と地域を看護師や看護という機能でつなげる方法を紹介した。各号の内容には、地域連携を推進するための教育や交渉の具体的な場面を紹介し、実践のヒントになるようにした。さらに、本文の内容をモチーフにした4コマ漫画が毎号掲載されており、それも合わせて書籍とした。

13. 令和元年版看護白書	共著	令和元年11月	日本看護協会出版会	健康問題を持つ看護師の就労支援や、定年後の看護師の就労継続、そして障がい者を新たに雇用して看護補助業務の一部を委譲した実例を紹介し、多様な人材の活用の実際を記述した。近年、がんや慢性疾患、精神疾患をもつ看護師も増えてきたことや障害者雇用の面からも有効であることを示した。担当は、3章2節多様な背景を持つ人材を活かす看護マネジメントでp86-94、熊谷雅美、奥村元子、福島通子、角田直枝ほか。
14. 発達障害のある看護職・看護学生支援の基本と実践	共著	令和2年8月	メジカルビュー社	発達障害の特徴をもつ看護学生や看護職を理解するための基礎知識から、学校や職場でできる支援が書かれており、類書がない書籍である。そのなかで、自施設での取り組み効果があった具体策を紹介した。当事者と問題や目標を共有していくことで、当事者にあった部署や配置をすることの重要性を示した。担当は4章実践支援のなかの3節臨床実務・現任教育・看護管理での応用p150-178である。北川明、小室葉月、岸本久美子、角田直枝ほか。
15. ズボラな看護学生の看護実習本	共著	令和3年9月	照林社	看護学生が実習前に学習すべき基本的事項を、学生が短時間で学習でき、実習への不安を軽減できるよう多彩なイラストを豊富に用いて解説した書籍である。著者の記述に対して、医師の監修者とともに監修者として作成にかかわり、記述の誤りの修正やよりわかりやすい表現を助言した。中山有香里、中山祐次郎、角田直枝
16. 在宅看護技術ナースポケットブック	共著	令和4年5月	学研	訪問看護師に必須とされる在宅看護の基礎知識と、スキンケア、栄養ケアマネジメント、呼吸ケアを、持ち運びやすいポケットサイズにまとめた書籍であり、編集と基礎知識p2-5の執筆を担当した。

<p>(学術論文(欧文))</p> <p>1. Development and validation of scales for attitudes, self-reported practices, difficulties and knowledge among home care nurses providing palliative care (査読付) (緩和ケアを提供する訪問看護師の態度、実践、困難感、知識に関する尺度の開発と検証)</p>	<p>共著</p>	<p>平成28年1月</p>	<p>Europe Journal Oncology Nurse 2016Jun;22:8-22 (ヨーロッパオンコロジー看護雑誌22巻p8-22)</p>	<p>訪問看護師に緩和ケアの教育評価を目指して、知識や態度を自己評価できるスケールの開発を目的に研究を行った。方法は、文献検討による項目で構成された評価票を作成し、緩和ケア教育を受けた訪問看護師125人を対象に調査を行った。結果は、122人を分析対象とし、態度、自己評価による実践、困難感、在宅緩和ケアに関する知識の領域で構成された評価票の信頼性が明らかになった。それにより、この評価票は訪問看護師教育に有用であることが明らかになった。研究者間の分担では、研究計画立案、評価項目の検討、データ分析を担当した。Megumi Shimizu, Misako Nishimura, Yoko Ishii, Masayo Kuramochi, Naoe Kakuta, Mitsunori Miyashita</p>
<p>(学術論文(和文))</p> <p>1. 新規採用看護師全員に健康支援室の看護師が個人面談を行った効果 (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成27年4月</p>	<p>茨城県立病院医学雑誌31巻2号、p21-23</p>	<p>急性期病院において、平成25年度の新規採用看護師全員の29人に対して、入職後3ヶ月の時期に健康支援室の看護師が個人面談を行い、メンタルヘルス支援や離職防止への結果を明らかにすることを目的として調査を行った。その結果、同年度内の離職はなく、健康支援室の継続面談に繋がるなど、全員面談の効果が明らかになった。しかし、面談前の時期に負担や不安に思ったものが8人あり、支援の時期についてのニーズが明らかになった。本研究の計画および全体の進捗管理、データ分析を担当した。石井和子、片田正一、角田直枝</p>
<p>2. 平成28年度診療報酬改定と地域医療構想策定による変化を想定した準備</p>	<p>単著</p>	<p>平成28年6月</p>	<p>北海道看護研究学会集録平成28年度p160</p>	<p>平成28年度の診療報酬改定は病院の機能分化と連携強化を目指しており、その一方で地域医療構想策定により病院の機能分化が進む変化が起こる。そのため、施設ごとに自施設の特徴を認識することが重要であり、他の施設との差別化を行い、地域で存在意義を示す必要がある。そのうえで、異なる機能の組織との協働が求められるため、自施設で求められる準備は、連携促進のための施設内でのシステム構築であると解説した。</p>

3. 臨床看護師の看護研究に対する自己効力感とその関連要因 (査読付)	共著	平成29年1月	茨城県立病院医学雑誌33巻1号 Page7-13	臨床看護師の看護研究に対する自己効力感とその関連を明らかにするために質問紙調査を行った。474人を対象として有効回答76.2%を分析した結果、約60%の臨床看護師が看護研究に関心と意欲をもっておらず、研究環境の調整・確保への自己効力感が最も低いことがあきらかになった。自己効力感に関連する要因は、年代、経験、研修参加経験、看護研究への義務感・関心・意欲、看護実践への応用・達成感であった。これにより研究実施の時間調整や自主的に行える研究支援の必要性が示唆された。本研究では、研究計画立案、評価項目の検討、データ分析、考察について担当した。角智美、角田直枝、森千鶴
4. 茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター病院における「苦痛のスクリーニング」のがん患者と非がん患者の比較結果 (査読付)	共著	平成29年1月	茨城県立病院医学雑誌33巻1号 Page15-18	都道府県がん診療連携拠点病院で行っている「苦痛のスクリーニング」において、がん患者と非がん患者の違いを明らかにすることを目的に調査を行った。4704件を分析し、がんと非がん患者を比較したところ、からだの辛さが2以上は、がん患者71.4%に対して非がん患者85.6%と、痛みは非がん患者が強かったが、専門職の介入を希望するのはがん患者75.9%に対して非がん患者41.2%とがん患者のほうが多かった。これにより疾患による特徴があきらかになった。鯉沼とも子、坂本聖子、前田睦美、大貫邦枝、角田直枝
5. 緩和ケア病棟の看護師が行うがん患者の看取りの時期の判断 (査読付)	共著	平成30年4月	日本看護学会論文集・慢性期看護47号 p31-34	緩和ケア病棟（以下、PCU）の看護師が行う、患者の看取りの時期の判断を明らかにすることを目的に、フォーカスグループインタビューによる調査を行った。8人の看護師にインタビューを行い内容を逐語録として質的に分析した結果、週、日、時間の3段階に分けて判断し、家族からの情報を得て症状の変化を見逃さずに観察して判断していることが明らかになった。PCU看護師は家族も患者の観察者としてとらえて情報を得て判断していると考えられた。助川千絵、富田彩、千田綾子、角田直枝

<p>6. 急性期病院の病棟看護師が実践する退院支援とその関連要因(査読付)</p> <p>7. 茨城県ELNEC-コアカリキュラム看護師教育プログラムの評価受講者の研修前と3ヵ月後の知識・実践を比較して</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成30年4月</p> <p>平成30年6月</p>	<p>日本看護学会論文集・在宅看護48号 Page19-22</p> <p>Palliative Care Research 13巻 Suppl. Page S449</p>	<p>急性期病院の病棟看護が実践する退院支援とその関連要因を明らかにする目的で、質問紙調査を行った。278部の配布に対し196部を分析対象としたところ、退院支援には十分な実践ができていないと評価したものが多かった。訪問看護体験や介護経験による違いに着目した分析では、訪問看護体験や介護経験をした看護師は、そうでない看護師より、有意に退院支援の自己評価が高かった。このことから、退院支援の向上には、訪問看護体験という実践教育の重要性が示唆された。角智美、池田美智子、<u>角田直枝</u></p> <p>茨城県ELNEC-コアカリキュラム看護師教育プログラムを受講した看護師に対して、研修前と3ヵ月後の知識と実践を比較した。研修終了後3ヶ月であっても、知識を実践に活かそうとしていることが明らかになった。角智美、<u>角田直枝</u>、神谷未加、久野美雪、鯉沼とも子ほか</p>
<p>(紀要)</p> <p>1. がん看護に関わる看護師の困難感に関する研究、困難感の特徴と関連要因</p>	<p>共著</p>	<p>平成29年3月</p>	<p>茨城キリスト教大学看護学部紀要8巻1号 Page19-27</p>	<p>全国のがん診療連携拠点病院に勤務する看護師において、がん看護に関する困難感とその要因を明らかにすることを目的としてアンケート調査を行った。947人に配布し403人を分析した結果、患者・家族とのコミュニケーションやシステム・地域連携などに困難感を感じていた。看取りに関する困難感は低かった。このことから、コミュニケーションスキルや地域包括ケアに関する教育の必要性が示唆された。直成洋子、小幡明香、原島利恵、富山淳江、<u>角田直枝</u></p>
<p>(その他：総説/依頼稿)</p> <p>1. 診療報酬改定による評価を先取りする取り組み 外来・地域連携で示す看護の成果(解説)</p> <p>2. 看護師の県内多施設共同育成の試み</p>	<p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成27年7月</p> <p>平成27年8月</p>	<p>日本看護評価学会誌 5巻1号p35-43</p> <p>看護管理2015年 8号 P670-675</p>	<p>平成28年度の診療報酬改定に向けて、外来看護や地域連携において、看護の成果として評価を期待したいものについて報告し、なかでも入院中と退院後の看護の継続性を高めるために、退院後の訪問看護を病院の入院料と組み合わせる提案をした。</p> <p>茨城県の二次保健医療圏の医師数・看護師数の比較を示したうえで、看護師不足地域との人材交流や共同で人材育成を行った試みを紹介した。</p>

3. 「看護管理者が創成する地域包括ケア」報告病院看護管理者の立場から（解説）	単著	平成27年12月	日本看護管理学会誌 19巻2号p87-88	病院看護管理者の立場から地域包括ケアを発展させるには、地域の看護管理者の連携や看護師同士の人事交流が有効であることを、実践例を紹介しながら解説した。
4. いま求められる看看連携の姿とは	単著	平成28年7月	ナーシングビジネス 2016年夏季増刊号 P10-20	雑誌ナーシングビジネスが発行した、「多施設・多職種との連携をつくる！地域包括ケア時代の看看連携実践事例集」というタイトルの夏季増刊号において、1章2節p10-20において、看看連携の発展過程を振り返り、自施設で行っている連携強化のための取り組みを紹介した。
5. 病院と地域をつなぐための多施設協働による看護師育成	単著	平成29年5月	病院76巻5号 P360-364	茨城県の二次保健医療圏の医師数・看護師数の比較を示したうえで、看護師不足地域との人材交流や共同で人材育成を行った試みを紹介した。
6. 初年度1年間を病院に派遣することによる新卒訪問看護師教育の試み	共著	平成29年7月	看護69巻10号p80-85	新卒訪問看護師を訪問看護ステーションで採用し、採用初年度を病院に派遣することで、基本的な診療の補助技術や日常生活援助技術を取得する教育の試みを行った。病院においてその1年間の配属部署や部署で習得できた技術を報告した。中島由美子、 <u>角田直枝</u>
7. 病院の看護部門ができる、緩和ケアにおける介護・福祉スタッフとの連携	単著	平成30年6月	Palliative Care Research 13巻 Suppl. Page S156	「介護・福祉スタッフと共に取り組む緩和ケア～地域で多職種が関わると安心が増える～」というテーマのシンポジウムにおいて、病院の看護部門として地域の介護職等の緩和ケア研修やケアマネジャーの病院体験研修の実施と効果について解説した。
8. 救急外来における非入院帰宅患者への療養支援体制の構築	単著	令和3年7月	看護管理2021年31巻 第7号 P565-569	救急外来において、繰り返し受診となる非入院帰宅患者に対して、外来療養支援看護師を配置した。その結果、高齢者の繰り返し受診者の減少がみられ、救急外来の非入院帰宅患者への支援を解説した。
(その他：座談会)				
1. “生活の中の看護”を病院に展開し地域につなぐ看護部長	共著	平成25年1月	コミュニティケア15 巻1号p48-53	訪問看護ステーションや介護施設の看護管理者の経験をもつ看護部長3人による座談会であり、生活に密着した看護の経験が、急性期病院での看護や地域連携に活かされるため看護教育にも重要であるという意見を共有した。長谷川寿子、平野美里香、 <u>角田直枝</u>

<p>2. コミュニケーションツールとしての“雑談力”の可能性</p>	共著	平成25年12月	看護66巻1号p70-76	雑談が職場の環境をよくするコミュニケーションツールとなるかというテーマで看護管理者3人が座談会を行い、緊張や対立を緩和したり、相互に理解を深めるのに役立つという発言を行った。野本史子、松浦正子、 <u>角田直枝</u>
<p>3. 地域包括ケア時代における多職種連携と医師の役割</p>	共著	平成27年4月	Medical Alliance1巻1号p6-19	域包括ケア時代において医師が果たす役割と看護師はじめ多職種との連携に関する医師3人との座談会に出席し、訪問看護の経験から生活を支える介護職との連携の重要性を発言した。伴信太郎、石松伸一、若林秀隆、 <u>角田直枝</u>
<p>4. 特定行為研修修了者が活躍する組織マネジメント</p>	共著	令和4年3月	医学界新聞（看護号）3463号	特定行為研修修了者は看護師全体の中では少ないが、修了者が活躍する病院における配置や修了者への支援を、他の3病院とともに意見交換した。神野正博、園田幸生、小松崎香、 <u>角田直枝</u>
<p>(国内学会発表)</p> <p>1. 病院からの退院後訪問看護の効果ー退院後訪問指導料に基づく訪問看護実施の2事例からー</p> <p>2. 特定行為研修受講者が続く要因の分析</p> <p>3. 働き方改革の視点で取り組んだ障がい者雇用</p> <p>4. 訪問看護出向事業に参加した病院看護師の退院支援に関する実践評価</p> <p>5. 緩和ケア病棟の退院支援における新型コロナウイルス感染拡大の影響</p>		<p>令和元年9月</p> <p>平成30年10月</p> <p>令和元年10月</p> <p>令和元年11月</p> <p>令和5年2月</p>	<p>第48回日本看護学会ー在宅看護学術集会（茨城）</p> <p>第57回全国自治体病院学会in福島</p> <p>第58回全国自治体病院学会in徳島</p> <p>第50回日本看護学会ー慢性期看護学術集会（鹿児島）</p> <p>第38回日本がん看護学会学術集会</p>	<p>病院から行った退院後訪問の2事例から、退院時に訪問看護の利用に消極的であっても、病院からの訪問看護なら導入できたことを明らかにした。</p> <p>全国的に特定行為研修受講者が増えないという状況のなか、受講者が続く要因として、先輩受講者から接点のある次の受講者に繋がっていることから、受講者自身が周囲に与える影響が重要であると結論付けた。</p> <p>障がい者雇用を行い、看護補助業務の一部を障がい者の部門に委譲したところ、病棟・外来の業務が削減できたことから、病院における障がい者雇用の有用性を明らかにした。</p> <p>訪問看護出向事業に参加した病院の看護師に対するアンケート調査を行い、出向後に退院支援への実践が高まったことが明らかになり、この出向は退院支援の向上につながるとの結論に至った。</p> <p>A病院の緩和ケア病棟で新型コロナウイルス感染拡大前後の稼働率、在院日数等を比較し、感染拡大後は在宅療養希望が増加し退院支援がさらに推進された。</p>